

# 日本災害看護学会 令和6年能登半島地震・能登豪雨災害看護プロジェクト活動報告

報告年月日：2024年10月25日（金）

活動者：宮前 繁

## 1. 活動期間

2024年10月22日(火) 8時30分～2024年10月24日(木) 14時00分

## 2. 活動場所

避難所：珠洲市立大谷小中学校（石川県珠洲市大谷町1字78番地）

仮設住宅：正院地区、宝立地区

在宅：大谷地区

## 3. 石川県珠洲市の地震被害状況（10月22日14:00現在 石川県庁情報第166報）

人的被害 死者：126人 うち災害関連死：29人 負傷者：重傷47人、軽傷202人

住家被害 建物全壊・半壊・一部破損：5,557棟、非住家被害：6,003棟

避難所開設数：10箇所 避難者数：68人

## 4. 令和6年奥能登豪雨による珠洲市の被害状況（10月22日14:00現在 石川県庁情報第25報）

人的被害 死者：3人 負傷者：軽傷9人

住家被害 建物全壊：9棟 床上浸水47棟 床下浸水97棟

避難所開設数：9箇所 避難者数：44人

## 5. 大谷地区避難者状況

大谷小中学校避難所避難者数

10月22日～10月24日：29人

## 6. 支援活動の実際

### <大谷小中学校避難所>

避難所内は、住民の方と石川県の行政支援者が手分けして清掃を行っており、綺麗に保たれていた。物資の管理も徹底されており、中長期的な需給バランスを考えながら、継続した物品確保の方法について検討が進んでいた。行政支援者と協力しながら、避難所内の環境整備を実施した。感冒症状の方が見られたという情報より、清掃のタイミング、方法を確認のうえ、清掃に用いるアルコールや次亜塩素酸ナトリウムの使い分け、高頻度接触面の清掃回数などの留意点について情報共有しながら適宜清掃を行った。活動期間中、朝晩の冷え込みが強かったが、発熱、咳嗽などの症状がある方はおらず、多くの方がマスクを着用、避難所に戻られた際は手洗いを実施されていた。

常備薬がある方の内服状況を確認しながら、血圧測定の実施など体調の確認をさせていただいた。中には、血圧が高値の方のいたため、定期的な血圧測定をお願いし、血圧手帳を作成した。水害の発生から1ヵ月が経過し、情報管理、環境整備、体調とそれぞれの面で落ち着きが見えていたが、住民

の方々にお話をうかがう中で、「雨が降ると落ち着かない」「家には近づきたくない」という声も聞かれ、水害による影響はまだ皆さんの心に色濃く残っている様子がうかがえた。

### <在宅避難者の訪問>

10月24日 訪問6件(うち不在5件)

大谷地区にて、在宅避難者の訪問を実施した。片岩町で暮らされている高齢独居男性とお会いすると、水害発生当初のお話を聞かせていただいた。家の被害は軽微であったものの、家の横に倒れてきた大木や、山から流出してきた土砂を見せていただき、紙一重であった状況をうかがった。健康状態は良好であったが、車両を持たれていない状況である中、バス等の公共交通機関の運行もないことから、家にこもられている時間が長くなったとお話されていた。町内の方々から声をかけてもらうこともあるが、一緒に車に乗せてもらうのは悪い気がして中々出かける機会を作れないとのことであった。ご本人にお茶会、往診等の情報を提供のうえ、別途住民の方に機会があれば一緒にお茶会等に参加いただけるように依頼した。

### <コミュニティ支援>

#### 1) 大谷地区お茶会

日時：10月22日(火) 13:00-15:00

場所：大谷小中学校ランチルーム

参加人数：11名

ピースボード災害支援センター(PBV)の方々と協働し、大谷地区における初回のお茶会を開催した。白玉ぜんざい作りとりハビリ体操を実施した。慣れた手つきで白玉をあっという間に作り終わると、PBV お手製のぜんざいと合わせ、皆さんで美味しくいただいた(写真1)。下肢の筋力が低下してきているという情報もあり、リハビリ体操中は、「足があがらないねー」という声が聞こえつつも、終わった後は「なんかすっきりしたよ」と笑顔も見られた(写真2)。初回のお茶会であったこともあり「あら、お久しぶり」という声が聞かれ、皆さん終始笑顔で話しを楽しまれていた。

#### 2) 宝立地区お茶会「宝立集いの会」

日時：10月23日(水) 13:00-15:00

場所：宝立町第一団地集会所

参加人数：17名

金沢市民芸術村の支援にて、落語が行われた(写真3)。落語の間は、クスクスという笑いが聞こえ、終了後は「楽しかった」「すごく良かった」と、笑顔でお話されていた。雨が降る中での開催であったが、みなさんの表情は穏やかであった。

### 7. 支援活動を通しての所感と課題

豪雨から1ヶ月が経過し、住民の方々は少しずつ「落ち着いてきた」とお話されるが、まだ水道の復旧が完了しておらず、土砂で通行止めの道も多く、生活面では多くの課題が残っているといえる。冬季を迎えるにあたり、健康状態を悪化させない環境、そして避難所管理者の負担になら

ない運営体制を踏まえ、ともに準備を進めていく必要がある。往診事業の開始等、徐々に状況は改善されていくが、地元の方々でも冬季の山越えは怖いとおっしゃっており、降雪による孤立の可能性は否定できないことから、改善された状況が維持されるよう、万全の準備と有事の支援体制を構築していく必要がある。

また、住民の方々が求められる支援のニーズを改めて確認しながら、支援あり方を考え、関わりを継続していく必要がある。地震による長期的な避難生活に合わせ、水害により改めてもたらされた過酷な状況に対し、住民の方々は強く、そして柔軟に立ち向かわれている。しかしながら、海を眺めながら「茶色いね」というつぶやきが聞かれたこと、大谷川を寂しげな表情で眺められていたことなどがあった。地震により倒壊した家々を目にする日々、さらに海や名所の大谷川の変ってしまった景観（写真4）を目にする日々は、住民の方々の心に強く影響をもたらしていることを理解し、専門職として一人一人の方と向き合い、思いを傾聴しながら、継続的に関わっていく必要がある。

### 参考資料・写真

写真1．白玉作りの様子



写真2．リハビリ体操の様子



写真3．宝立集いの会の様子



写真4．大谷川の様子



以上